

幼児教育および小学校教員養成課程における ピアノ基礎技能テキストの考察

小倉 隆一郎*

Discussion of Using a Basics Skills Text for the Piano During the Training of Preschool and Primary School Teachers

Ryuichiro OGURA

要旨 本学では Music Laboratory によるピアノ基礎技能養成を目的とした授業に「大学ピアノ教本」(教育芸術社)をテキストとして採用している。このテキストはバイエルの抜粋曲が5割強含まれ、埼玉県小学校教員採用試験の科目にバイエル演奏が課されていたことが採用理由のひとつであった。しかし、今年度同上採用試験からバイエルの演奏課題が削除された。また来年度、本学の音楽科目のカリキュラム変更が予定され、ピアノ関係授業の学習期間が広がることによってカリキュラムの新たな展開が可能である。この2点の変更を機会に、幼児教育および小学校教員養成課程のピアノ技能養成を目的としたテキストについて再考することが本論の目的である。バイエルの使用に関するテーマを含む先行研究と他の養成校に対するアンケート調査を実施した。

キーワード：ピアノ学習 バイエル 幼児教育 小学校教員養成課程 ミュージックラボラトリー

1. 研究課題

本学では2007年より Music Laboratory (以下 ML と略) を利用した授業に「大学ピアノ教本」(教育芸術社)をテキストとして採用している。このテキストの用途は、幼児教育および小学校教員養成課程におけるピアノ基礎技能養成である。同テキストの採用理由のひとつが埼玉県小学校教員採用試験の科目にバイエルの演奏課題が含まれることであった。しかし平成26年度採用試験(2013年実施)から、バイエルの演奏課題が削除された。

また、来年(2014年)度より、本学の音楽科目の内、免許・資格必修の音楽ⅠⅡの開講時期が、2年次春学期から1年次秋学期に変更される。この変更によって、MLによるピアノおよび弾き歌いの授業期間が、従来の2年次→3年次の4セ

メスターから1年次秋学期→3年次の5セメスターに拡大する。半年間ではあるが、学習期間が広がることによってカリキュラムの新たな展開が可能である。

上の2点の変更を機会に、幼児教育および小学校教員養成課程のピアノ技能養成を目的としたテキストについて再考したい。現在のテキスト「大学ピアノ教本」はバイエルからの抜粋曲が5割強含まれるため、バイエルの使用に関するテーマを含む先行研究を調べ検討する。また関東地区の他の養成校ではどのようなテキストを使っているのか、について調査したい。

2. バイエルまたはバイエルを主体とした テキストに関する先行研究

本学で、バイエルを主として編集されたテキストを採用している理由の一つに、埼玉県小学校教員採用試験の科目にバイエルの課題が含まれてい

*おぐら りゅういちろう 文教大学教育学部心理教育課程

たことは研究課題で述べた。現在のテキスト「大学ピアノ教本」の採用理由は他に、バイエルの利点を活かした選曲とカリキュラム構成が可能な点にある。教員養成校でバイエルを使う利点と欠点を今一度整理するため、この点にかかわる先行研究を検討する。

柏瀬・牛田は1985年に全国の教員養成校200校を対象として、バイエルの利用状況に関するアンケート調査を実施した。結果、回収できた160校の内、バイエル教則本を使っている学校が76%、主としてバイエルから抜粋した教本を使用する学校を含めると92%の養成校でバイエルが使われていた。ここで、柏瀬らはバイエルの課題の多くが指の練習に終始するといった批判に対し「(前略)45番位からはリズムカルな曲、旋律的に美しい曲、イメージすることのできる曲など、小曲としてのまとまりも感じられる楽しいものが多くなってくる。(中略)このとき単なる指練習として終らせるのではなく、曲を通して音楽する心を育てていきたい。そのためには、バイエルを十分使いこなす、すなわち多面的に扱うことが好ましいと思われる。」と述べている(柏瀬・牛田1986)。多面的に扱うことの一例として、バイエルの曲を使った創作ダンスの提案は、学生に音楽とリズムのイメージを想起させる点で興味深い。

バイエルの利点について、作曲者自身がピアノの演奏技術の習得について「あまり広範囲にはわたらず段階を追って」学べると述べている(バイエル2006)。この利点に関し、城戸らは「彼が提唱するコンセプトがどの程度合理的かつ緻密に実現されているかについては、感覚的判断や印象批評にたよるのではなく、適切な分析を通して検証される必要がある(後略)」との考えから、バイエル1番から106番までについて「音域」「ポジション」「速度」の3つのデータを公平に数値化して検討した。結果、ピアノ曲の難易度を決定づける上の3つの要素をグラフ化したところ「(前略)それぞれの事項においてスイッチ・バックを繰り返しながら上昇線を描いていることが確認さ

れた。(城戸ら2003 p.130)」と報告している。上の引用文の「スイッチ・バック」とは、「速度」を例にあげると、No.87で最速値に達した後、No.88とNo.89で速度を緩め、次のNo.90で最速値に戻るといった現象である。

加藤は、幼児教員養成課程におけるピアノ基礎技能のテキストとして、バイエルとクラーク・ピアノ教本を比較した。両方のテキストを作曲方法・拍子・小節数・音程・音域/リズムグラフの5つの観点から比較検討している。音域/リズムグラフは「教材の曲を一曲ごとに、音域と使用されているリズム型を示したものである。音域グラフにおいては、音階を縦軸にとった。(後略)」と説明がある。これらの比較では、作曲方法・拍子・小節数で、バイエルよりクラーク・ピアノ教本が有利であるとし、音域/リズムグラフからは「バイエルは同じような作品が続く、最後で突然むつかしくなるが、クラーク教本は変化に富む作品が、次第に複雑になってゆく。バイエルは、ド=1の固定観念に落ち入りやすいが、クラーク教本は多様性に富む。」ことが報告されている(加藤1989)。「最後で突然むつかしくなる」ことに関しては、城戸らの速度分析からNo.87で最速値に達することは前に述べた。加えて、音域の分析では「90番以降の終盤では、右手に初出広音域が多く(中略)音域平均値の左右差も拡大している。(城戸ら2003 p.122)」との結果であり、90番以降で難易度が高くなる傾向を示す根拠の一つと理解できる。一方、ド=1の固定観念に関して、バイエルではG-durの調号は70番で初めて出てくるが、Fisを使わないで調号がないG-durの曲が32番から存在する。従って、学習段階の初期で必ずしも「ド=1の固定観念に落ち入りやすい」とは言い切れないと考えられる。しかし、多くの調子を体験できるクラーク教本との比較では、確かにバイエルは不利である。バイエルと他のテキストとの比較では、前田が「メトードローズピアノ教則本」を取り上げ「(前略)2つの古典的教則本の類似点あるいは相違点の中に、初心

者導入初期に有効な指導法へのいくつかの啓示を読み取ることができる(前田 2012)」としている。

これまでの先行研究の検討から、幼児教育および小学校教員養成課程におけるピアノ基礎技能の指導に関して、いわゆるピアノレッスン用の単一のテキストに頼ることは難しいと考えられる。そこで、バイエルから必要な曲を選択し、不足している練習課題については他の曲を追加する方法で、養成校の要求と学生の実態に合わせて編集したテキストが考案されている。本学では「教員養成のための『大学ピアノ教本』」(教育芸術社)を採用しているが、指導内容上の主な理由は次の3つである。

- (1) 学習初期から低音部譜表が導入されている
- (2) 急な難易度の上昇を是正してある
- (3) 伴奏付けを準備する課題が含まれている

三好はバイエルから抜粋・編纂されたテキストを11冊取り上げ、比較・検討した。これらのテキスト編集の要点は上の3点と共通した内容を含んでいる。(1)の一例として「大学ピアノ教本」ではバイエル8番の右手部分を1オクターブ下げ、左手部分は低音部譜表とし、CとG7の全音符のコードに変更している。三好は、同様な変更が他のテキストにも多々みられるとし「『バイエル』の役立つ要素はそのままに、1オクターブ下げること、読譜力を養うというねらいが読み取れた。」と述べている。(2)については「『バイエル』のみでは難易度が急に上がってしまう部分には、適度な難易度の小品や編曲を間に配置することでその落差を補っているものもあった」また、(3)にかかわって、バイエルに弾き歌いを意識した伴奏付けが追加・変更される場合があり、「和音記号やコードネームを早い段階から登場させ『歌を指導しながら演奏する』という、指導者に求められる演奏技術を初歩の段階からとり入れ、習得させることを目的としている。」と説明している。調性に関しては「『バイエル』では終盤に登場していたへ長調を前半に登場させているものがほとんどであった。またハ長調、へ長調、

ト長調という3つの長調の間で移調の練習を意識させているテキストが多く見られた。」と報告している(三好 2010)。調性について、論者が「簡易ピアノ伴奏による こどもの歌名曲アルバム」(ドレミ楽譜出版社)に掲載された220曲の調性を調べた結果、表1の通りであった。

表1 「こどもの歌名曲アルバム」の調性

調性	曲数	調性	曲数
へ長調	70	ホ短調	4
ハ長調	51	ハ短調	4
ニ長調	42	ニ短調	4
ト長調	24	イ短調	1
変ホ長調	11	ロ短調	1
変ロ長調	6	ホ長調	1

従って、へ長調をピアノ学習の初期課題に含めることは、養成校の学生にとって誠に好都合である。

3. 教員養成校におけるアンケート調査

保育士・幼稚園教諭および小学校教諭養成校におけるピアノ基礎技能のテキストの採用状況および採用の理由を主として調査するため、アンケートを実施した。

3-1. アンケートの概要

3-1-1. 目的

テキストに関する次の3項目について、データを取得する。

- ①ピアノ基礎技能養成を主とする授業で使用しているテキストの書名・出版社と採用の理由。
- ②子どもの歌の弾き歌い、または伴奏を主とする授業で使用しているテキストの書名・出版社と採用の理由。
- ③その他の教材(声楽、コードネーム指導等)について、書名・出版社と採用の理由。

加えて、ピアノ基礎技能養成の授業形態についてうかがい、テキスト全般についての意見を記入

してもらおう。

3-1-2. 期間

平成25年10月9日アンケート発送し、10月16日（水）までに返送投函をお願いした。

3-1-3. 依頼先

本論は、埼玉県の教員採用試験から実技課題が削除されたことが研究のきっかけになった。従って、埼玉県を中心とした関東近県の養成校をアンケートの依頼先とした。また、本学は、保育士資格・幼稚園教諭免許取得のコースが設置されているため、これらの養成校も対象とする。

関東地区の保育士・幼稚園教諭および小学校教諭養成校36校の教員にアンケートを依頼した。県別および養成校種別の内訳は、埼玉県9校、東京都13校、栃木県3校、神奈川県5校、千葉県3校、群馬県・山梨県・長野県がそれぞれ1校、保育士・幼稚園教諭養成校20校、保育士・幼稚園教諭および小学校教諭養成校16校である。

3-1-4. 依頼および送付の方法

あらかじめ、アンケートをお願いする旨、電話およびFAXで連絡した後、返信用封筒を同封してアンケート用紙を郵送した。

3-2. アンケート結果

アンケートを送付した36校中、29校より回答があった。以下、回答結果をまとめる。

3-2-1. ピアノ基礎技能養成を主とする授業において使用しているテキストは？

表2 ピアノ基礎技能養成のテキスト

テキスト	校数	%
バイエル	15	51.7
バイエルを主として含む曲集	5	17.2
その他のテキスト	4	13.8
自由選択（バイエル含む）	1	3.5
テキストを使用しない	4	13.8
計	29	100

バイエルピアノ教則本をテキストに採用しているとする回答数は15校（51.7%）、バイエルを主として含む曲集は5校（17.2%）、両方を合わせると20校（68.9%）である。また、学校で決め

られたテキストは特に無く自由選択だが、本年はバイエルを使っている1校を加えると、72.3%の養成校がバイエルまたはバイエルを含むテキストを採用している。バイエルを主として含む曲集の内訳は、「大学ピアノ教本」（教育芸術社）が3校、「小学校・幼稚園教諭・保育士をめざす人のための『Let's play the BEYEL』」（圭文社）、「ピアノ教本ムジカ」（全音楽譜出版社）がそれぞれ1校である。一方、その他のテキストを採用していた回答が4校（13.8%）である。その他のテキストとして、「メトードローズピアノ教則本」（音楽之友社）、「かんたんメソッド コードで弾きうたい」（カワイ出版）、「ピアノ曲集ⅠⅡ保育者・教諭になるために」（共同音楽出版社）、「新しいピアノ教則本」（カワイ出版）があげられている。

3-2-2. 子どもの歌の弾き歌い、または伴奏を主とする授業において使用しているテキストは？

この質問に対する複数の回答があったテキストを多い順にまとめる。

表3 子どもの歌等のテキスト

テキスト	出版社	校数
ポケットいっばいのうた	教育芸術社	4
こどものうた200（正統）	チャイルド社	4
こどものうた100	チャイルド社	3
子どもとたのしむ童謡カレンダーⅠⅡ	音楽之友社	3
こどもの歌名曲アルバム	ドレミ楽譜出版社	2
幼児の音楽教育	音楽教育研究協会	2
音楽リズム 幼児のうた楽譜集	東京書籍	2

その他のテキストとして、「こどものうた140選」（ドレミ楽譜出版社）、「幼児の音楽教育うたと日本の四季」（全音楽譜出版社）、「音楽科教育法」（教育芸術社）他の回答があった。

3-2-3. その他の教材（声楽・コードネーム指導等）に使用しているテキストは？

声楽・合唱の指導用として、「新声楽指導教本」（教育芸術社）が2校、「声楽教本（小学校課程・幼稚園課程・保育課程）」（教育芸術社）1校、「フラウエンコール」（ドレミ楽譜出版社）1校の回

答があった。器楽の指導用として「改訂楽器奏法の基礎指導」（音楽教育研究協会）2校、伴奏付けの指導用として「ピアノちゃんのピアノ即興演奏」（ドレミ楽譜出版社）、「やさしいピアノ伴奏法」（音楽之友社）、「かんたんメソッド コードで弾きうたい」（カワイ出版）が、各1校よりあげられた。また、主として幼稚園・保育所で使用するマーチに特化したテキストでは、「ピアノマーチ集」（全音楽譜出版社）、「マーチアルバム」（音楽之友社）を採用している。楽典の基礎テキストとして、「基礎から始める音楽づくり Cookin' Music」（共同音楽出版社）、「楽典ドリル」（聖徳大学出版部）があげられた。

3-2-4. ピアノ基礎技能養成の授業形態

(1) 個人およびグループレッスン

ピアノのレッスン室や小教室で行われるピアノ基礎技能養成の授業の1コマ90分あたりの受講生数は、4人から12人までの回答があった。1コマあたりの平均人数を計算すると7.24人である。また、グループレッスンの回答の中には、14~20名のクラスで「ピアノ・楽典・うた・コード・簡易楽器合奏・リコーダーなどが音楽ⅠⅡの内容である。従ってピアノレッスンは1人3~5分程度となる。」と、ピアノ基礎技能養成の他、多くの内容を週1コマの授業ですべて行っていると推測されるコメントが含まれていた。

(2) Music Laboratory

Music Laboratory（以下MLと略）の授業で、もっとも受講者が多いクラスの人数をたずねたところ、15人から42人までの回答があった。ML授業のクラス人数の平均は、27人である。また、MLとピアノの個人レッスンまたはグループレッスを併用しているとの回答は6校であった。併用方法の詳細まではたずねていないが、2校に聞き取り調査を行った。1つは、クラスをAとBに2分割し、90分の内、前半45分はAがML、Bがピアノ個人レッスンとし、後半はAとBを交代する方法である。他の1校は、隔週でMLとピアノ個人レッスンを交代する方法が採用され

ている。

その他の記述欄には、個人・グループレッスンおよびMLに関する様々な取り組みが垣間見られる。例えば、個人・グループレッスンでは「10名前後の学生をグループレッスンにしたり、個人レッスンにしたりして～」工夫している。MLでは「(ML授業)において、先生は3名」との回答があり、アシスタント・ティーチャーと推察される複数の教員を活用する事例がみられた。また、MLのシステムはないが、「約30台あるキーボードにヘッドフォンをつけさせ練習しているところを順に見て(音を聴くためのヘッドフォン装着の時間がもったいない)指導をしています。」と、電子キーボードを使った大人数の授業におけるご苦労がうかがえるコメントがあった。

3-2-5. 「音楽テキスト」とりわけピアノ基礎技能養成用のテキストについての意見

ピアノ基礎技能養成用のテキストに関して、バイエルまたはバイエルを主として編纂された曲集を使うことに肯定的な意見として、「基礎技能は、しっかりした奏法と、表現力をみにつけさせる必要がある。従って簡単な伴奏付けプリントと共に『大学ピアノ教本』（バイエル抜粋）のようなテキストにより指導する必要がある。」「まずは基本が第一なので、バイエル等で学習し、さらに幅広い音楽・感性を養える音楽を学ぶのが理想だと思います。」また、バイエルから抜粋・選曲し使い方を工夫することについて「バイエルは（中略）曲を選べば音楽的にわかりやすく有益な部分も多いと感じる。この様な基礎練習と動きを連想させる基礎練習が組み合わされた教材がほしいと考えている。」「ピアノテキストについては、バイエルでも使用の仕方・目的により色々工夫ができると思います。」との意見があった。バイエルの前の段階のテキストについて「初心者の導入に関してはバイエルとメトードローズの使用が半々くらいですが、そのテキストに入る以前の段階ではそれぞれの教員がそれぞれ選択しています。」

一方、バイエルの使用には迷っているとの意見

では「いわゆる、バイエル・チェルニー・ソナタ信仰からどう脱出するか、本学でも近いうちに議論しなくてはならないと強く思っています。」「レベルの差がありますが同一の教本を購入させるため、Beyel～Sonatineまでの抜粋曲集を使用した。適当な本が決められないで今日まで至っています。」また就職対策を考慮してのバイエルの使用について「保育園・幼稚園の就職試験に沿って教本が決まったり、バイエルが無難という考えの先生方が多い気がします。」「地域差はあると思うが、現場の就職試験は現在もバイエル・ブルグミュラー等で学生のレベルをみることが多いと思う。」

指導時間が短いのでピアノ基礎技能のための練習曲より、易しいピアノ曲や子どもの歌を重視しているとの意見では「短期間しかないので、やさしいピアノ曲、歌の曲を使って技術指導をしていくことが有効だと思います。」「現状では、短い時間で、幼児教育の実践に役立つよう、最初からすぐに歌って弾くことを指導している。学生がよく努力して、授業についてくるので、なんとか成り立っている。」との報告があった。

テキストについて検討中との意見は「我が校も、今のテキストで良いか検討中です。ピアノ・歌・楽典など、それぞれ問題点があり…」「エチュード偏重を改め、曲想の違う多様な曲を教材とすることで、学生の音楽感性を高め、又、美しさや楽しさを実感させることを目指して改革中です。」のコメントがあった。

ML授業におけるピアノ基礎技能および伴奏付けの展開について「ピアノ基礎技能に関しては、特に初心者に対してはMLを使い、楽譜の理解、基本的な奏法を集団で学ぶことに効果があり、テキストも鍵盤で遊んだり、みなで一斉に学べる教材を用意した。進度に個人差が出て、それぞれが自力で練習できるようになってからは、ML内では拍やリズムのとり方を練習したり伴奏法の授業に移行している。名曲選があることで初心者でも美しい曲ができた喜びで意欲を高めることができ

てきた。自学できるよう授業で導きながら弾いてみたい曲があることが大切だと考えている。」との意見が出された。ピアノの学習経験が少ない学生に対してはMLを活用した指導に効果が認められ、そしてML指導に適したテキストを作成したこと、また大人数のML授業では学生が自学自習できるような工夫が有効であることが分かる。

3-3. アンケート結果の考察

教員養成校におけるピアノ基礎技能のテキストとして「バイエル」の使用については賛否両論がある。しかし、本論のアンケート結果をみると、現状では68.9%の養成校がバイエルピアノ教則本またはバイエルを主として含む曲集をテキストに採用している。さらに、ピアノ基礎技能用テキストが自由選択で教員に一任されており、採用されたテキストにバイエルが含まれる1校を加えると72.4%となる。バイエルを使う理由について、とりわけ初心者が段階を追って無理なく演奏技術を身に付けられるとの意見として「初めてピアノを学ぶ学生に、順序よく確実に基礎の練習ができ、初歩の教則本として優れていると思われる。」「順を追って基本的に演奏技術を身につけるため」「読譜・指づかいなど基本から発展させていける。」「未経験や多少の経験がある学生にとって学習しやすい。」とのコメントがあった。また、就職試験との関連で「採用試験にバイエルが使われているため初心者に指導しやすいため」「地域差はあると思うが、現場の就職試験は現在もバイエル・ブルグミュラー等で学生のレベルをみることが多いと思う。当短大では2年生になるとブルグミュラーに進む(1年単位未修得者は別)。現場での試験の目安になっていると思う。」との意見が出された。その他の理由として「1冊の中に音楽的要素が上手くまとめられている。」「高校生の初心者に馴染んでいる。教員間で連携しやすい。」との内容が記された。

子どもの歌の弾き歌い、または伴奏を主とする

授業において使用しているテキストに関しては、採用されたテキストに大きな偏りはみられない。複数校で採用されたテキストは表3に示す7冊である。それぞれ採用の理由をたずねた。「ポケットいっぱいのおうた」(教育芸術社)については「幼保～小学校共通教材までカバーしている。」「小学校教材・童謡・簡易楽譜等、様々な学生に対応できる。」「コードがついていて、文科省の小学校の曲も対応している。」とのコメントがあり、幼児から小学校歌唱共通教材の歌がコードネーム付きで掲載されていることが採用のポイントになっている。「こどものうた200(正統)」(チャイルド社)では「曲数が多い、簡易伴奏である。」「トータル400曲と収録曲が多く、卒業後も使えると卒業生からの話もある」「手遊び等も含まれており、伴奏が比較的弾きやすい。」とのコメントがあり、曲数が多く伴奏が弾きやすいことが選択の主な理由である。「こどものうた100」(チャイルド社)では「簡易伴奏とオリジナル伴奏に近い伴奏が併載されている。」「以前は、こどものうた200、続こどものうた200を使っており『100』は今回初の試みでとり入れた。簡易譜とオリジナル(に近い)譜の両方が載っていることが採用の理由。」「コードがついていて、文科省の小学校の曲も対応している。」とのことで、簡易伴奏とオリジナルに近い伴奏の両方が掲載され、しかも小学校歌唱共通教材も含まれることが採用の要件になっている。

「子どもとたのしむ童謡カレンダーⅠⅡ」(音楽之友社)の採用理由としては、「四季のオリジナルな童謡を選び、また保育活動で歌われているものを編集し、合わせて手遊びなどもそのなかに含まれ、幅広く使用している。」「季節の童謡等、難しいがオリジナル伴奏で曲数は少ないが良い曲が入っている。」「音楽之友社版は原曲のため採用試験用として～」のコメントがあり、オリジナルに近い伴奏譜が掲載されている点が採用の決め手になったと推察される。

声楽の指導用テキストについて、3校より使用

の回答があった「新声楽指導教本」(教育芸術社)は「新しい曲が多く、現場で活用しやすい」「収録曲数も多く、選択肢が広がるため」とのコメントがあった。器楽指導用テキストでは、2校より回答があった「改訂楽器奏法の基礎指導」(音楽教育研究協会)は「楽しく使用できる。ピアノ・うた・打楽器を柱として授業を行っているので、打楽器の指導に用いている。」「保育現場で用いられるリズム楽器の解説と、子どもを対象とした合奏曲集として使用。」というように打楽器および合奏の指導に活用している。楽譜の読み方など、楽典の指導のためのテキストを使用する事例がみられた。「楽典ドリル」(聖徳大学出版部)を授業で使うことについて「学生たちは、小中で音楽の用語やきまり等をしっかり学んでない様です。指導要領改訂後では、現在の学生たちは現場の小学校で教えることになっています。又、読譜等、毎日の練習の為に。」と、理由を記している。

コードネームの指導に特化したテキストの使用もみられた。「ピアノちゃんのピアノ即興演奏」(ドレミ楽譜出版社)は「コードネーム伴奏付けに加え、即興演奏についても学習の入口が示されている。」といった理由であり、「やさしいピアノ伴奏法」(音楽之友社)は「弾きながらコードネームを学べるから」というのが採用のポイントになっている。現在出版準備中であるとした養成校では、コードネーム奏のためのテキストの編集方針として「ドレミで歌うことで音楽のしくみを理解し、移調(手を移動)することで、様々な調に対応して伴奏できるような視点でコードネーム奏をとらえている。」と述べている。

4. あとがき

本学では2009年度に、MLを利用したピアノ基礎技能の授業カリキュラムを見直した。見直しの要点は、テキストの練習課題の提示方法と進め方の指針を明示することであった(小倉2009)。その際、現在のテキスト「大学ピアノ教本」につ

いて、授業の目的、学生の自学自習課題として、ML授業における使い易さ、の3つの観点から精査している。結果、テキストを見直す要素は見当たらなかった。本年、埼玉県教員採用試験科目から実技が削除されたこと、および本学の音楽必修科目の年次配当の変更を機会に、バイエルを利用することの是非を含めて、テキストの再検討を行った。

先行研究の調査では、バイエル教則本について、90番から難易度が急に高くなる傾向がみられるが、その他は総体的にみて難易度が滑らかな上昇線を示している。一方、バイエル各曲の調性と低音部譜表の課題は、子どもの歌の伴奏を考慮すると不満足感は否めない。そこで、バイエルから必要な曲を選択、必要に応じて編曲し、不足している練習課題については他の曲を追加する方法で編集されたテキストの有用性が浮上する。このようにバイエルを主として編集されたテキストは数々存在し、それぞれ特徴を有している。採用にあたっては、さらなる比較・検討が必要である。

保育士・幼稚園教諭および小学校教諭養成校におけるピアノ基礎技能のテキストの採用状況を把握する目的で、関東地区の養成校を対象にアンケート調査を実施した。その結果、今年度バイエルまたはバイエルを含むテキストを採用しているとの回答が72.3%であった。バイエルを使う理由について、とりわけ初心者が段階を追って無理なく演奏技術を身に付けられる、就職試験に使われるからとの意見が出された。また、子どもの歌の弾き歌い、伴奏を主とする授業において使用するテキストに関しては、採用の理由として、幼稚園・保育所から小学校までの歌が掲載されている、コードネームがついていることがあげられた。また、簡易譜とオリジナル譜の両方が載っていることが採用の理由と回答した養成校が複数あり、レベルの差が大きい受講生の指導に対応していることと推察される。

本論において、バイエルおよびバイエルを主として編集されたテキストについて先行研究とアン

ケートによる調査を行った。その結果、現在本学で使用中のテキストに関し、早急に見直す要件はみあたらなかった。ただ、前著で明らかになった「ピアノの学習経験の無いグループで進度が伸びない(小倉 2009)」という問題点については、テキストの使い方を中心に再検討する必要がある。すなわち、初心者が興味・関心をもち、学習意欲を喚起させる選曲と自学自習ができる学習システムの構築が急務である。

引用文献

- 柏瀬愛子, 牛田幸子. 1986. ピアノ教則本「バイエル」について分析とその活用. 名古屋女子大学紀要 32. pp.217-229.
- 城戸透, 他3名. 2003. ピアノ・エチュードの体系的な研究 II: バイエルの研究 (2). 愛媛大学教育学部紀要. 第I部, 教育科学 50 (1). pp.119-138.
- 加藤太郎. 1989. 幼児教育学科におけるピアノ演奏技術修得についての一考察 (II): バイエル・ピアノ教則本とクラーク・ピアノ教本の比較. 武蔵野短期大学研究紀要 4. pp.69-76
- 前田美樹. 2012. 「子どもの歌」ピアノ指導法 (1) 『バイエルピアノ教則本』と『メトードローズピアノ教則本』の比較から. 青森中央短期大学研究紀要 (25). pp.41-51.
- 三好優美子. 2010. バイエルピアノ教則本 抜粋テキストにおける編纂についての調査報告. 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要 45. pp.181-190.
- 小倉隆一郎. 2009. ML 授業におけるレッスン・カリキュラムの見直しとその効果. 文教大学教育学部紀要 43. pp.39-47

参考文献

- 伊藤康英編. 2006. バイエルピアノ教則本「やさしい楽典」付 New Edition. 音楽之友社
- 東ゆかり, 白川佳子. 2007. 保育者養成校における授業カリキュラムと就職試験の内容との関連性についての一考察. 鎌倉女子大学紀要 14. pp.63-78
- 石井哲夫. 2012. 小学校教員養成コース学生向けピアノ教材の開発: 大人数クラス授業での使用を前提として. 教育実践研究: 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 (6). pp.117-129

付録 ピアノ基礎技法のテキストに関するアンケート用紙

音楽担当教員各位

文教大学 小倉 隆一郎

幼児教育および小学校教員養成課程における「音楽テキスト」に関するアンケート

文教大学では、現在、バイエル・チェルニーの練習曲を主としたテキスト「大学ピアノ教本」を使っています。このテキストの使用理由の一つであった埼玉県教員採用試験の科目から、本年度、ピアノ実技（バイエル課題）が削除されました。そこで、カリキュラムの見直しを検討しています。

つきましては、大変お忙しい中、恐縮ですが、以下のアンケートにご回答いただきたいと存じます。

期間が短く、申し訳ございませんが、同封の返信用封筒をご利用の上、**10月16日（水）**までに投函いただくと助かります。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

-----以下、アンケート-----

1. ピアノ基礎技能養成を主とする授業において

1-1. 使用しているテキストは？

[例] 教員養成のための「大学ピアノ教本」	教育芸術社

1-2. 上のテキストを使っている主な理由

[例] Beyel を中心とした練習曲が、自習しやすい順に掲載されている。

2. 子どもの歌の弾き歌い、または伴奏を主とする授業において

2-1. 使用しているテキストは？

[例] 「日本の子どもの歌」唱歌童謡 140年の歩み	音楽之友社

